

## 分析 経済産業省「一般消費者アンケート調査結果」

# 消費者から見た 葬式の傾向

前号(通巻125号)で、2011年8月10日発表の経済産業省「ライフエンディング・ステージ」報告書を取り上げた。今回は、報告書作成にあたって行った一般消費者アンケート調査の結果を分析する。

(注) データは本調査結果を用いているが、分析は筆者が独自に行っている [碑文谷創]

### 調査実施要領

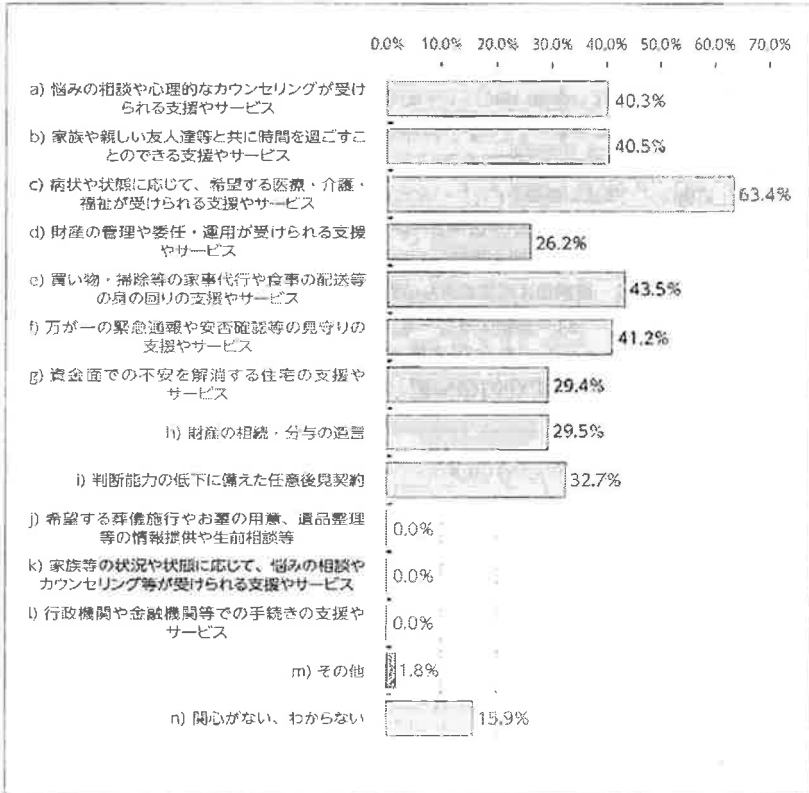
- 調査対象  
国内に居住する約 10,000 人の消費者(属性の偏りはなるべく排除する)  
なお、年齢階層は 40 代以上を中心に、特に高齢者のサンプル数を充実させる。
- 調査方法  
インターネットモニターを活用した WEB アンケート(約 9,000 人)に加え、インターネットを使わない高齢者(60 歳以上)の意見等を収集するために郵送アンケート(約 1,000 人)を併用する。
- 調査項目  
経済産業省ホームページに掲載
- 調査期間  
平成 23 年 1 月 15 日～2 月 3 日(3 月の東日本大震災の前で、大震災の影響は反映していない。)

### 【編集部による注】

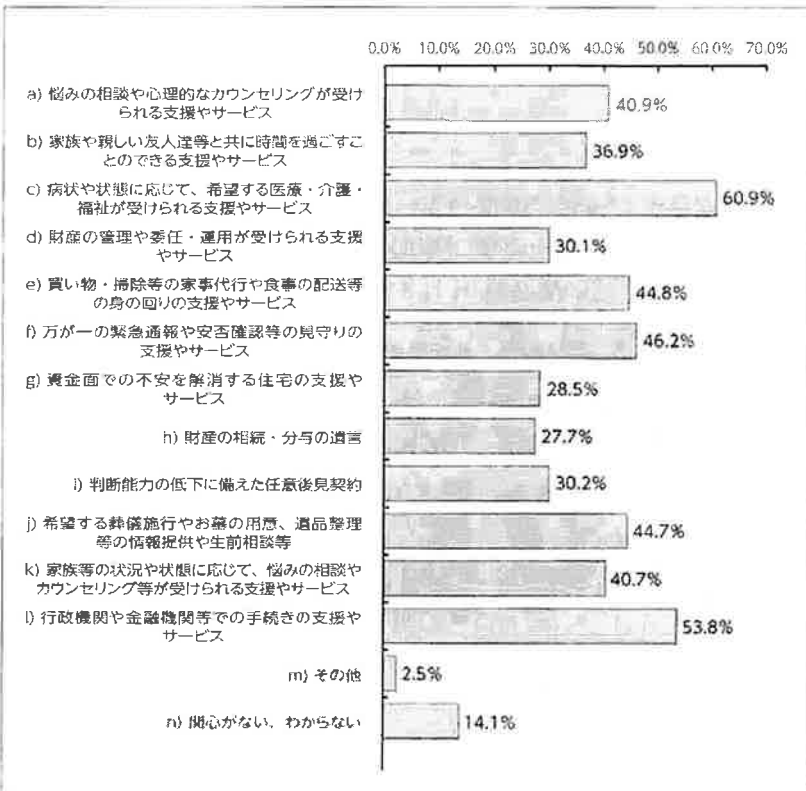
ライフエンディング・ステージについては、若い世代では実感が乏しいので、調査回答に恣意性が大きくなる。40 代以上を対象にしたほうがいい。またインターネット利用者には 60 代以上の世代が少なく、インターネットによる調査だけでは実態としての 60 代以上の考えが正しく反映されにくい。そこで今回の調査ではインターネット利用者であっても 40 代以上を重くするとともに、60 代以上では郵送回答を加味することとした。しかし、こうした工夫は行っても実態とは一定のズレが生じていることは否定できない。こうした危惧(きぐ)はあったが、今回の調査結果では 40 歳未満の回答者においても、40 代以上の回答と世代による意識の差と想定されるもの以外においては極端なズレが生じていなかった。また、郵送回答を含め 1 万人規模という前例のない多い回答数によって平準化が行われ、その回答集計結果はバランスのとれたものとなっている。

- ① ライフエンディングでは医療・介護への関心が高い—どういふ支援を希望しているか…18
- ② 60代になると自分の終末期の準備を始める—ライフエンドのために準備をしているか…19
- ③ 費用は自分の預貯金で準備が多数—費用の準備…19
- ④ 若い世代では祖父母の死—近親者のライフエンドの経験…20
- ⑤ 70代以上に多い事前相談への関心—葬儀で関心があるサービス…20
- ⑥ 自由意思、小規模葬儀を希望—自分の葬儀への希望…21
- ⑦ 実際に故人からの意思伝達は少ない—「故人」のライフエンドの希望・意思の伝達の有無…23
- ⑧ 生前の財産関係の意思表示もなされていないケースが多数—「故人」の財産等の相続や処分方法に関する意思や意向の伝達…23
- ⑨ 斎場(葬儀会館)葬の現況は 7 割超か—「故人」の葬儀の場所…25
- ⑩ 実際は緩やかな変化—「故人」の葬儀はどう行われたか…25
- ⑪ 「葬送の多様化」は緩やかに進行して市民権を獲得—「故人」の遺骨の扱い方…26
- ⑫ 近親者の葬儀体験者は 7 割以上が「ほぼ納得」—「故人」の葬儀についての納得感…27
- ⑬-1 葬祭業者の情報は身近なところから—葬祭業者の情報入手方法…27
- ⑬-2 選択の決め手は身近な情報—葬祭業者の主な決定情報…28
- ⑭ 葬儀費用の実勢は 3 分化の方向—葬儀に係わる費用等…28
- ⑮ 会葬者数 50 人以下が 3 分の 1 を超える—会葬者の人数…31
- ⑯ 遺族に負担が大きいのか「遺族代表挨拶」—利用・実施したサービス、必要だと思うサービス…32
- ⑰ お布施・死後の事務処理についての支援を希望—もっとあったらよかった支援やサービス…33

●図1 ①あなたのためにあるとよいと思われるサービス



●図2 ②家族のためにあるとよいと思われるサービス



## ①ライフエンディングでは医療・介護への関心が高い —LIFEの支援を希望しているが

ここでは2とおりの調査を行っている。①は「あなた（回答者）自身の希望」（図1）、②は「（回答者の）家族のための希望」（図2）である。

ここで、希望する医療・介護・福祉が受けられる支援やサービスで①（63.4%）、②（60.9%）とも6割強が望んでいる。

一方で、希望する医療・介護・福祉が受けられる支援やサービスで①（63.4%）、②（60.9%）とも6割強が望んでいる。一方で、希望する医療・介護・福祉が受けられる支援やサービスで①（63.4%）、②（60.9%）とも6割強が望んでいる。

年齢社会になったことによる切実さが反映している。また、終末期医療、高齢者介護の社会的システムが、極めて安定感を欠いていることからくる不安も反映しているだろう。

家族のこととなると心配になるのは「行政機関や金融機関等での手続きの支援やサービス」（53.8%）。自分の死後に家族にこうした煩わしさから解放させたい、という思いからなのだろう。

## ② 60代になると自分の終末期の準備を始める

—ライフエンドのために準備をいつするが

自分のライフエンド（終末期・死）について、「考えたことがない、わからない」とする回答が全体で41・9%ある。内訳を見ると20代・30代では6割強となっている。これは仕方がないことだろう。

ところが60代以降になるとこれが変化し、60代では29・2%、70代以上では15・6%と大きく減少する。

それに伴い「自分自身で検討や準備」は60代では18・8%、70代以上では34・1%と増える。「家族や親戚等に相談」も60代で10%、70代以上では19・7%。いずれも50代までは「桁台」であるのに、60代以上では大きく増加している。これは仕事からのリタイア（定年）の時期と大きく関係しているものと思われる。

依然として家族で終末期や死についてフランクに話せる環境にはなく、特に50代以下の世代に遠慮等が見られる。しかし、いわゆる高齢世代ではタブーではなくなっている状況が浮かび上がっている。

高齢者が自分の終末期について考え始めたとはいえ、外への行動につながる

るケースは少ない。「専門家等に相談」という具体的な行動に出ているのは、70代以上でもわずか3・1%に留まる。

（表3）

●表3 具体的にどんな形で準備をしているか？

		自分自身で 検討や準備	家族や親戚等に 相談	専門家等に相談	考えたことがない
(n=10418)	合計	13.8%	8.6%	1.1%	41.9%
(n=635)	20代	4.6%	4.4%	0.9%	66.8%
(n=1431)	30代	4.5%	3.8%	0.3%	65.3%
(n=2074)	40代	6.0%	4.5%	0.5%	53.6%
(n=2067)	50代	9.2%	6.9%	0.9%	42.4%
(n=2644)	60代	18.8%	10.0%	0.9%	29.2%
(n=1567)	70代～	34.1%	19.7%	3.1%	15.6%

## ③ 費用は自分の預貯金で準備が多数

—費用の準備

費用の準備についても40代以下では「考えていない・わからない」が2割以上と多いが、60代では10%、70代以上では5・8%と少なく、何らかの準備を行うおうとしている人が多数を占めている。

「費用の準備」の回答内容については世代による違いがさほど見られない。

「自分の現金・預貯金・有価証券その他の資産」と回答しているのが約7割、「生命保険（少額短期保険を含む）」が3〜4割である。

冠婚葬祭互助会については70代以上で21・1%であり、おそらくこれが互助会への世帯加入率に近い数字ではないか。これを見ると、互助会加入は60代以下では15%未満となっているので、将来互助会加入世帯は減少する可能性をもっている。

費用については「自分で考えている」が60代以降では多いにもかかわらず、年代が上がるほど「葬儀を行う人に任せる」という回答も多い。これは資産家であるか準備できる余裕がないかのどちらかではないか。

「香典」への依存率は1割台と低く、これは各世代で共通している。（表4）

●表4 費用の準備

		自分の現金・預貯金・有価証券、その他の資産	生命保険（少額短期保険を含む）	冠婚葬祭互助会等への積立金	香典	親族や友人からの借入	配偶者や子供等、葬儀を行う人に任せる	その他	考えていない、わからない	無回答
(n=10441)	合計	67.3%	45.0%	11.8%	15.2%	0.6%	16.7%	0.3%	16.0%	0.0%
(n=635)	20代	61.3%	36.2%	7.2%	16.5%	0.9%	7.9%	0.2%	30.9%	0.0%
(n=1431)	30代	61.0%	43.3%	7.8%	16.1%	1.0%	12.5%	0.3%	24.7%	0.0%
(n=2074)	40代	62.6%	45.5%	7.4%	16.2%	1.1%	11.4%	0.2%	20.6%	0.0%
(n=2067)	50代	64.4%	46.3%	10.7%	16.4%	0.4%	15.0%	0.4%	16.0%	0.0%
(n=2661)	60代	72.7%	44.9%	13.4%	12.9%	0.4%	20.0%	0.5%	10.0%	0.0%
(n=1573)	70代～	76.2%	47.9%	21.9%	14.6%	0.4%	27.5%	0.4%	5.8%	0.3%

## ④若い世代では祖父母の死

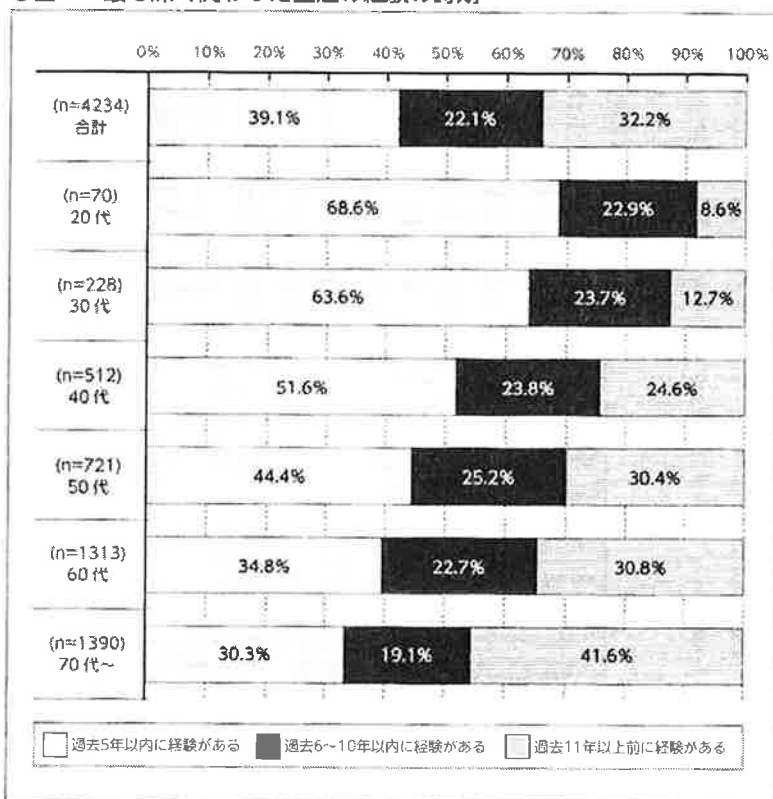
—近親者のライフイベントの経験

近親者のライフイベント（死）についての体験は、「過去5年以内に経験がある」との回答は全体では39.1%、20代が68.6%、30代が63.6%と傑出している。これは80歳以上の死亡者が半数を超えることで、若い世代には「祖父母」の死の体験が多くなっていることを示している。（図5）

「親の死」を体験するのは40代、50代、60代という成年世代が多い。といつても女性の平均寿命が高いことから「父の死」→「母の死」という順序が多い。「配偶者の死」は60代以降が多い。

ここでは「子どもの死」「きょうだいの死」は「それ以外の親族」に含まれているのでわからないが、「それ以外」が多いのは30代の12.3%、70代以上の17.3%が目につく。前者では「乳

●図5 最も深く関わった直近の経験の時期



●表6 直近に経験した「故人」との関係

	あなたの父	あなたの母	配偶者の父・母	祖父母	配偶者	それ以外の親族
(n=3847) 合計	29.7%	26.1%	16.4%	7.9%	8.3%	11.6%
(n=70) 20代	12.9%	4.3%	5.7%	72.9%	0.0%	4.3%
(n=228) 30代	25.4%	8.3%	13.2%	40.8%	0.0%	12.3%
(n=512) 40代	41.4%	15.6%	16.0%	17.2%	1.2%	8.6%
(n=721) 50代	42.6%	20.0%	20.1%	7.6%	2.2%	7.5%
(n=1113) 60代	31.2%	31.6%	19.0%	1.2%	7.4%	9.7%
(n=1203) 70代~	17.4%	33.7%	13.3%	0.4%	17.9%	17.3%

## ⑤70代以上に多い事前相談への関心

—葬儀で関心があるサービス

幼児の死」「おじ・おばの死」、後者は「きょうだいの死」「子どもの死」である可能性がある。ここで「死に方」は年齢順が多い、というあたりまえの結論と共に、必ずしも「あたりまえ」とは言えない死「がかなりある点に留意しておきたい。（表6）

最も関心が高いのは「死後に発生する事務処理の総合サポート（法的手続き、各種名義変更、財産処分等）」で、全体で35.7%と高い。（表7）

●表7 葬儀で関心のあるサービス

		事前の相談やプランニング	生前契約	葬儀等セミナーへの参加	湯灌、死化粧、エンバール	遺族支援	新しい葬送(※)	遺品の整理、供養、回収	死後の事務処理	その他サービス	関心がない	無回答
(n=10385)	合計	26.3%	16.6%	5.5%	8.6%	3.8%	23.3%	24.2%	35.7%	0.5%	34.8%	0.6%
(n=635)	20代	29.8%	18.4%	5.8%	12.3%	5.2%	12.0%	24.9%	28.7%	0.2%	40.9%	0.0%
(n=1431)	30代	28.4%	20.3%	5.3%	10.6%	4.1%	19.1%	27.3%	33.9%	0.1%	37.6%	0.0%
(n=2074)	40代	26.1%	19.9%	5.1%	8.2%	4.4%	22.3%	26.9%	37.2%	0.4%	35.7%	0.0%
(n=2067)	50代	25.1%	14.9%	4.9%	6.9%	3.0%	21.9%	23.1%	34.4%	0.3%	36.4%	0.0%
(n=2636)	60代	22.5%	14.3%	5.5%	6.6%	3.3%	29.3%	21.5%	35.5%	0.4%	32.9%	0.9%
(n=1542)	70代~	31.1%	14.6%	7.1%	11.5%	4.0%	24.8%	23.6%	40.0%	1.2%	29.5%	2.3%

※永代供養墓、合葬墓、散骨・自然葬、樹木葬、手元供養等

今回の経済産業省の報告書が関心を呼んだのは、インターネットでの反響等を見るかぎり、葬式や墓といった業種の人よりも行政書士、司法書士、弁

護士、信託、保険の業種の人たちに対してであった。報告書は死後の事務処理に携わる人たちが正面切って自分たちのこの分野における仕事をアピールする機会となったと思われる。

少なくとも死、死後のことへの関心が葬式や墓だけである時代は完全に過ぎ、より実務的なことへの関心が高まる傾向にある。

最近注目を浴びている「事前相談(葬儀・供養等に関する事前の相談やプランニング)」は全体で26・3%。特に70代以上では31・1%と高い関心を集めている。「自分の死」に対する切実感では70代以降ということだろうか。

一方で、永代供養墓、合葬墓、散骨・自然葬、樹木葬、手元供養等の新しい葬送への関心が高いのは40代以降で、特に60代が29・3%と最も関心が高い。新しい葬送形態は戦後第1世代を中心に支持されているようだ。

湯灌、死化粧、エンバールといった遺体処置への関心は、若い世代である20代12・3%、30代10・6%、そして当事者として意識する70代以上で11・5%と高くなっている。若い世代では映画「おくりびと」効果もあるだろうが、祖父母の死を体験して「きれいにあげたい」という優しい感性が影響していることだろうか。

総じて「遺族の精神的支援(グリーフケア)」への関心は低い。

## ⑥ 自由意思、小規模葬儀を希望

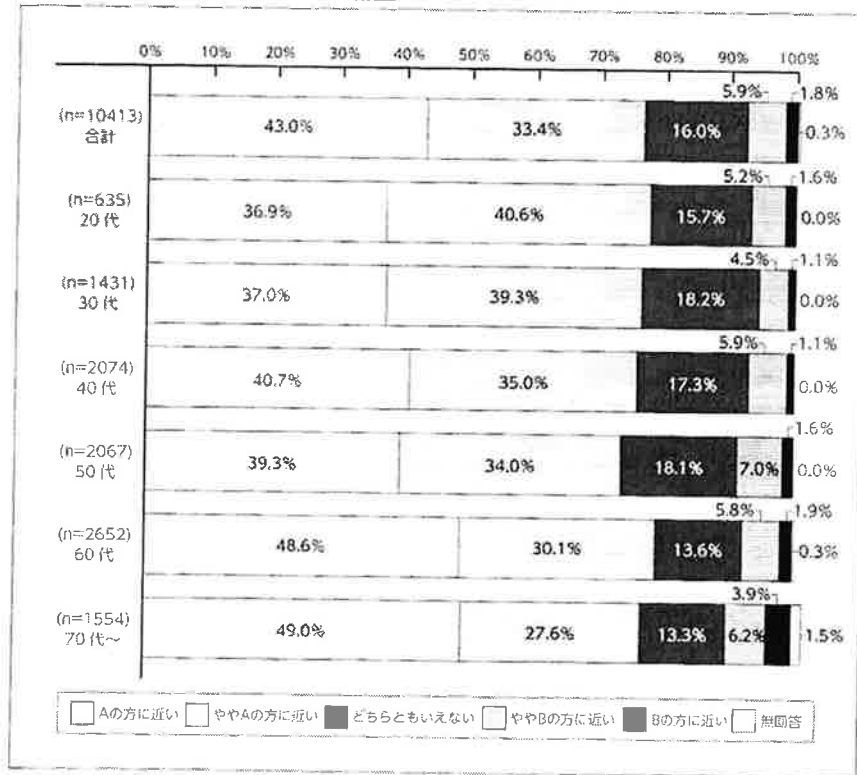
—自分の葬儀への希望

葬儀の個人化は95年頃に始まり、2000年以降に明確になってきたが、これは意識調査でも明確になっている。「葬儀の内容」においても全体で「B慣習や習俗に従って実施する葬儀」を

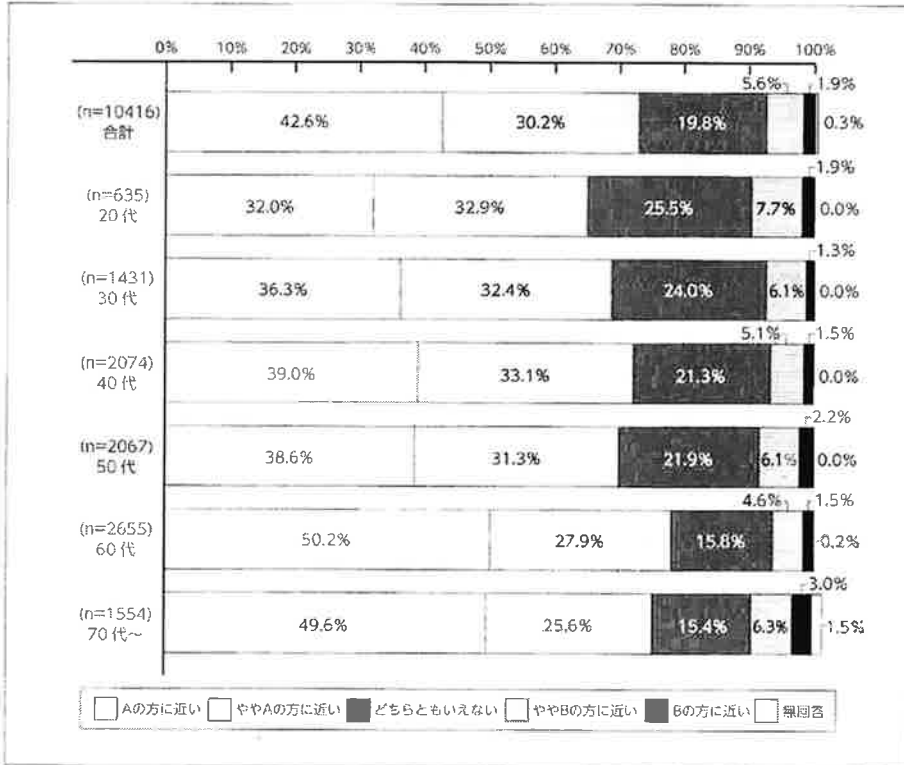
希望するのは7・7%に留まり、「A本人や家族等の意思を尊重して実施する葬儀」を希望が76・4%と圧倒している。(図8)

とはいえ「伝統的葬儀」を希望する

●図8 葬儀の内容についての希望



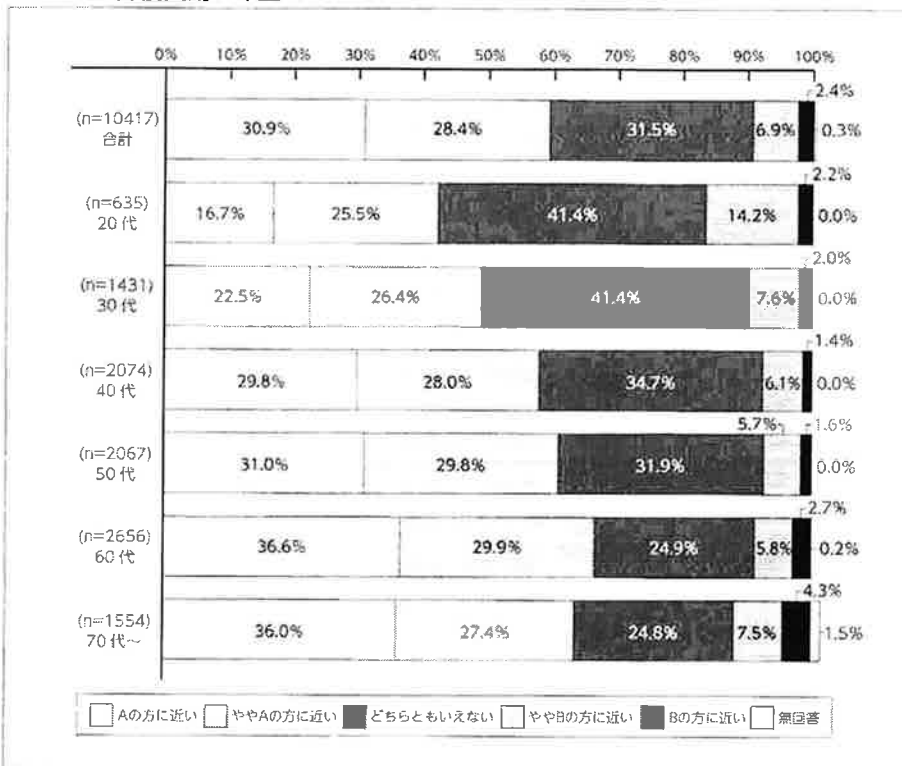
●図9 葬儀の規模の希望



「葬儀の規模」では「A家族や親しい友人達のみで実施する葬儀」を希望する

「葬儀の規模」では「A家族や親しい友人達のみで実施する葬儀」を希望するものが72・8%と圧倒。「B故人や家族等に関する人達に広く案内して実施する葬儀」を希望するのはわずか7・5%。近親者中心の葬式を希望するのは60代、70代以上に多く75%以上である。高度経済成長期、バブル期は遠く去ったと言っべきだろう。(図9)

●図10 葬儀費用の希望



「葬儀費用」については「A内容を犠牲にしても、できるだけ迷いが出ているのは「葬儀の費用」

「A内容を犠牲にしても、できるだけ迷いが出ているのは「葬儀の費用」についての考え方である。(図10)